

健康 ぶらざ

加齢黄斑変性

—ものが歪んで見えたりしていませんか?—

聖路加国際病院 眼科部長 / 聖路加国際大学 臨床教授 小沢 洋子

企画：
日本医師会

No. 558

自覚症状

加齢黄斑変性は、眼底の中心である黄斑（図1）という部分に病変があり、ものが歪んで見えたり、ぼやけて見づらくなったりする病気です。文字や顔の表情が見づらくなったり、車の運転に支障を来したりします。50歳以上の1%以上の方に見られ、最近、増加しています。

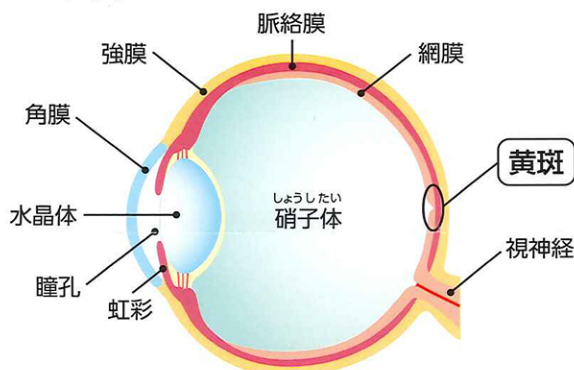


図1 目の構造

病変の状態と治療

加齢黄斑変性は、黄斑部に新生血管という病的な血管が形成され、そこからの出血や滲出物が黄斑部にダメージを与える「滲出型加齢黄斑変性」（図2）と、黄斑部の神経や血管が変性する「萎縮型加齢黄斑変性」の2種類に分けられます。滲出型には、薬剤を眼内（硝子体内）に繰り返し注射する抗血管内皮増殖因子療法（抗VEGF療法）が行われます。治療効果は高いのですが、後遺症が残ることが多いので、早期発見・早期治療が重要です。萎縮型には今のところ

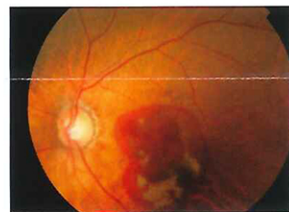


図2 滲出型加齢黄斑変性の眼底写真

治療法がありませんので、予防が重要になります。

発症リスクと予防

加齢黄斑変性の発症リスクには、喫煙、高脂肪食、メタボリックシンドローム、遺伝子の変化などがあります。遺伝子の変化以外は、リスク因子を回避することが予防になります。特に喫煙は世界中のどの疫学調査においても、最大のリスクです。過去に喫煙していても、その後に禁煙を続ければリスクが下がることも知られています。ぜひ禁煙していただくようお勧めします。

生活習慣を改善し、もしも症状に気づいたらすぐに眼科を受診するのが、今できる最良の方法です。



日本医師会ホームページでは、健康ぶらざのバックナンバーがご覧いただけます。



日医
バーコード読み取り機能付き
携帯電話もしくはスマートフォン
でご利用になれます。